健康インフォメーション！

教えて！市立病院

〈第 139 回〉

RS ウイルス感染症について

■問合せ／市立病院総務課企画財務担当 ☎ 22-2450

【今月のドクター】
小児科長
髙橋（たかはし） 憲幸（のりゆき） 医師

RS ウイルスによって引き起こされる呼吸器系の感染症で、２歳頃までにほとんどの子どもが感染し、その後も再感染を繰り返します。一般的に冬に流行するとされていますが、近年は春から夏に流行しています。

主な症状は発熱・鼻水・鼻づまり・咳で、重症化すると、呼吸が苦しい・ミルクや水が飲めない・眠れない・顔色が悪くなるといった症状が出てきます。幼児以降や大人は症状が軽く、乳児、特に生後６カ月未満の赤ちゃんは重症化しやすいです。また、免疫力が弱った高齢者、基礎疾患を持つ人も注意が必要です。

RS ウイルスの検査は鼻水を用いた検査キットで判定できます。ただし、検査できるのは１歳未満の乳児と入院患者限定です。治療は症状を和らげる治療のみで、特効薬はありません。当科に毎年 50 人弱の赤ちゃんが RS ウイルス感染症で入院しています。生後数カ月の赤ちゃんでは診断時から入院を考慮し、それ以外では内服などの対症療法を行い、改善なく悪化すれば入院治療に切り替えます。治療期間は数日から２週間程度を要します。

予防は手洗いや咳エチケットなどの一般的な対策とともに、予防薬があります。高齢者と妊婦にはワクチンがありますが、小児用ワクチンはなく、モノクローナル抗体製剤という薬があります。その薬は重症化の危険性が高い赤ちゃんにのみ投与することが認められており、当科でも行（おこな）っています。施設内や家庭内感染を完全に防ぐことは難しいため、少しでも減らせるように、感染対策とともに小児用の予防薬の適応拡大や妊婦用ワクチンの普及が望まれます。